

○「自分の気持ち至上主義者」

「多様な個性のあり方が称揚される現代では、普遍的で画一的な物差しによってではなく、個々の場面で具体的な承認を周囲から受けることによって、自己の評価が定まることになります」(①p 15)

「自分の内部に安定した肯定感の基盤があれば、それをよりどころとして異質な人間とも接触を保ち続けたり、場合によっては対立を表明することもできるでしょう。しかし、いまはその基盤を自らの内面に持ちえず、他者の反応にその役割を求めているために、目の前に現れた異質な人間は、自己肯定感を根底から揺さぶり、危機にさらしているのです」(①p 21)

「(人間関係における外キャラの呈示は) 深部まで互いに分かり合って等しい地平に立つことを目指すのではなく、むしろ互いの違いを的確に伝え合って上手く共生することを目指す技法の一つ」(①p 26)

「相手の気持ちをおもんばかり、自分の気持ちをおもんばかってもらえることを前提としたコミュニケーション」(③p 133)

「『よいルール』は個人が決めるものではなく、集団的にひとりで決めていく」(②p 90)

「ケータイの『圏外』表示がもたらす不安感は、(略) この世界から自分だけが消え去ってしまったかのような感覚から来るもの」(①p 3)

「(状況功利主義者は) 他者が見えなくなっている。いや他者との関係において自己は『ある』のだから、自分も見えなくなっている」(②p 174)

「みんなに呼びかけられた言葉は、ほとんどの場合個人の心には届かない」(②p 19)

→他者の価値が低い（他者を異物とみなす）

○どうすればいいのか、対話

「目先の安心だけを求めて自分たちの生活圏を物理的・心理的なゲートで外部から閉ざすことではなく、むしろそのゲートを異質な世界へ向けて開放していくこと」(①p 62)

「個人と個人が正面から向き合い真実を求めて執念深く互いの差異を確認しながら展開してゆく〈対話〉」(②p 105)

「『対話』とは、『自分を偽らずに合意できる真実を求め続けるコミュニケーション』である」(④)

○対等性

「いったんどこかのグループ内に入ったら、決して誰か特定の人物が優位に立ってはならないという原則も存在しています／そもそも現代は、物事の価値に絶対的な序列性がなくなった時代です。『上から目線』を嫌悪し、できれば人間関係からも序列性を排除したいのが本音でしょう。だから、どうしても上下関係になりそうな人間は、異なるカーストとして最初から圏外化してしまい、認知の対象とすらしないのです」(① p 18. 19)

「(〈対話〉の基本原則) 人間関係が完全に対等であること」(② p 132)

○個性、自尊心

「自分固有の生きた言葉」(② p 70)

「心とか、考えというのは全員違うのがあたりまえだ」(③ p 18)

「ほんとうの自分の意見なんてありえない。わたしたちは、相手に合わせて、さまざまに意見やその言い方を変えていく」(③ p 31)

「共通性のうえに成り立つ個性」(③ p 88)

「(対話によって)『誰のものでもない真実』に近づけると同時に『個人』が真に尊重され、『かけがえないお互い』の差異(『個性』)も深いレベルで『理解し合える』と思います」(④)

「プライドは『力んで守る』ものであるというよりも、むしろ『他者とのオープンな関係の中で自然に形づくられる』ものではないでしょうか」(④)

○対話を阻むもの、「傷つかない・傷つけない」

「自分の身に危険がふりかからない程度の『思いやり』など、気楽な『思いやり』であり、そんなものはじつは『利己主義の変形』だ」(② p 147)

「すべての人を傷つけないように語ることはできない」(② p 160)

「誰をも絶対に傷つけないような言葉を発すること、それはもう言葉の否定以外にはありえない」(② p 164)

「私の『できないなあ』という言葉には、ある人を傷つける暴力が含まれていたことを認めよう。そのうえで言いたいことだが、このひとことで教師を断罪する子供とその背後に控える親たちは、自分の側にも大きな暴力が潜むことを知ってほしい」(② p 160)

「自分とは感受性がまったく違っているかもしれないのである。だから、『他人の痛み』をわかるのはじつはたいへんなことなのである」(② p 189)

→「だから」配慮するとはならないのか

『対話は必要です。だが、そんなに相手を追いつめちゃ駄目だよ。相手に逃げ場を与えなければ』(略) 等等の『論理』を振りかざして、丁重に巧妙にズルク〈対話〉を根こそぎにするのである」(② p 197. 198)

○そうは言うものの…

『私の言ったことに反対なら、なぜ直ちに本人がそう反論しないのですか』『反論できない人もいますのです！』S氏は吐き捨てるように言った」(② p 183)

「主張しない『個』は社会においては存在しないのと同じことである」(③ p 29)

「女たちは『ツッコミ小人』という名の『鏡の精』に囁きかける。『私は自分で思っているほど美しいかしら？自分で思っているほど賢いかしら？自分で思っているほどすばらしい人間かしら？私はナルシズムに騙されてる勘違い女じゃないかしら？ねえ、教えて。本当のことを教えて！出ないと私、不安で外に出られない。怖くて他人に会えないの！』」(⑤ p 32)

○参考

- ① 『キャラ化する・される子どもたち—排除方社会における新たな人間像』
土井隆義 岩波ブックレット NO. 759
- ② 『〈対話〉のない社会—思いやりと優しさが圧殺するもの』中島義道 PHP新書
- ③ 『ニッポンには対話がない—学びとコミュニケーションの再生』北川達夫・平田オリザ 三省堂
- ④ 檜垣のページ「〈対話〉再考」
- ⑤ 『「イタイ女」の作られ方～自意識過剰の姥皮地獄～』 中村うさぎ 集英社文庫